

平成19年度の学会賞の授与について

第26回日本自然災害学会学術講演会が、平成19年9月25～26日に、札幌市に於いて開催された。9月26日（水）に開かれた総会の中で、学会賞の授賞式が行われた。日本自然災害学会の学会賞として、功績賞と学術賞が設けられている。

学術賞は能島暢呂氏（岐阜大学 教授）と葛葉泰久氏（三重大学 教授）に授与された。功績賞・国際賞に該当はなかった。



学術賞

受賞者：岐阜大学工学部教授 能島 暢呂 氏
研究題目：「震度曝露人口による震災ポテンシャル評価と震度指標の理解と活用への応用」
掲載誌：「自然災害科学」Vol. 23, No. 3, 2004, pp. 363-380
「自然災害科学」Vol. 25, No. 2, 2006, pp. 165-182

受賞理由

震度は地震動強さを表す単一の指標であり、地震防災を考える上で有用な指標として多用されてきた。近年の計測震度の導入により、精緻化、高密度化が進み、その重要性が一段と増している。候補論文は、震度曝露人口という指標を新たに提案し、震災全体のポテンシャル評価を試みたもので、防災に軸足を置いた意欲的な研究として高く評価される。よって、日本自然災害学会の学術賞に値するものと判断された。

受賞コメント

このたび、日本自然災害学会平成19年度学術賞を受賞することができましたことを、誠に光栄に存じます。受賞の対象となった研究は、「震度曝露人口」という新たな概念をベースにして、震度に関する理解を深め、いっそうの活用役に役立つことを狙いとしたものです。震度曝露人口とは、震度分布と人口分布の重ね合わせ効果を考慮した震災ポテンシャル指標として提案したもので、環境リスク分野で用いられる用語にヒントを得たものです。

まず、既往の大規模地震や、切迫しつつある海溝型巨大地震を対象として震度曝露人口を推計し、地震規模、震源タイプ、都市化度

合いなど多面的な観点から分析しました。その結果、イベント間・時代間・地域間での相互比較を容易に行うことができ、震度曝露人口が地震によるインパクトの包括的尺度として有用であることを示しました。

次に、震度が器械計測化され観測網が高密度化した近年の主要地震を対象としました。震度観測量は膨大になったものの、旧震度階との不連続性や被害の実態との乖離が指摘されるなど、新指標としての評価が定まらない状況が長く続いたように思います。その中において、計測震度の解釈方法を観測事実から客観的・実証的に引き出したいと考えました。震度曝露人口を集計して比較したところ、住家被害や人的被害との間に巨視的関係が成り立つことを見出し、被害の全貌の概略推定を可能とする「被害総量推定モデル」を構築しました。被害関数形式で表現されているため、計測震度の具体的イメージの形成にも有用であり、最も身近な地震動強度指標としての正しい理解につながる成果と考えています。

これまで、地震のたびにひたすらデータを整理し、震度曝露人口を比較・評価してきました。今回の学術賞授与にあたっては、地道で泥臭い研究の成果を学術の一つの形としてお

認めいただき、大変ありがたく存じます。これを励みにいっそう努力する所存です。

一連の研究を支えて下さったのは、論文共著者である岐阜大学 杉戸真太教授・久世益充助教をはじめとする研究室の皆様です。そし

て、震度研究における議論好きな諸先輩方には有益な助言や激励をいただきました。また、関係機関からは、様々なデータを提供いただきました。末筆ながら、関係各位に対する深い感謝の気持ちを表します。



学術賞

受賞者 : 三重大学大学院生物資源学研究科 教授 葛葉 泰久氏
研究題目 : 「確率統計的評価による豪雨特性の分析に関する研究」
掲載誌 : 「自然災害科学」 Vol. 24, No. 4, 2006, pp. 409-421
 「自然災害科学」 Vol. 25, No. 4, 2007, pp. 525-540

受賞理由

豪雨の確率統計的解析評価により豪雨特性を明らかにしようとする一連の研究であり、近年、発生頻度が高くなっている集中豪雨の事例に適用したものである。特に2007年の論文は豪雨の時空間データの分析法に新しい指標を導入しており、豪雨災害の防止・軽減に大きく寄与するものと評価される。よって、日本自然災害学会の学術賞に値するものと判断された。

受賞コメント

このたび、平成19年度の日本自然災害学会・学会賞（学術賞）を賜ることになり、学会と会員の皆様に深く感謝する次第です。自然災害分野で非常に権威ある本賞を授与していただきまして、非常に感激しています。

2004年に三重大学に赴任し、その年に台風21号による、三重県域での内水氾濫・外水氾濫・土砂災害を目の当たりに致しました。学部学生時代から学位をいただくまで、学生・研修員として京大防災研究所に所属し、石原安雄先生、高棹琢馬先生、池淵周一先生のご指導を賜わってまいりましたので、折にふれ、恩師・先達の豪雨や洪水に関する重要なお研究に接してきたつもりでしたが、その後の防災科研時代を含め、三重県に転居するまで、自分で「災害そのものを扱った研究」をすることは

あまりありませんでした。

2004年の台風21号で、三重県内の災害調査にかかわらせていただき、豪雨や洪水の対策を行なうために、確率統計的な知見が如何に大事かということ、遅まきながら、不惑にしてようやく認識いたしました。そこで、寶馨先生や星清先生の論文を読ませていただきながら、確率分布の適合度評価について、いまだ勉強途中であります。今回、賞を賜ったのは、「もっと勉強せよ」という意味だと思えますので、この分野で何か残せるよう、今後も精進したいと思います。

授与の対象としていただいた論文は、科学研究費、河川環境管理財団の助成をいただいで行った研究の成果が元になっています。深く感謝する次第です。なお、(ここで自分の所属機関に対する謝辞を述べるのもいささか非常識かとは思いますが、お許してください) 地方大学としての使命に基づき、「三重県の自然災害の軽減に資する研究をしなさい」と、数名で構成される著者らのグループに、「研究科 COE」という、少し気恥ずかしい名前の助成をつけてくださった、著者の所属研究科にも深く感謝する次第です。このようなすばらしい賞をいただいたのは、本稿でお名前を挙げきれなかった方々も含めた、数々の恩師・先達・同僚・後輩・組織のおかげです。どうもありがとうございました。